

〈教材研究〉

## 蜘蛛の糸の主人公は誰？

平野 博通（名古屋サークル）

一、はじめに

「蜘蛛の糸」（芥川龍之介）は多くの人が知っている話であるが、授業でどのように扱っているのだろうか。教育出版では中一の教科書に読書教材として載っている。名古屋サークルで検討して、この小説の主人公は誰？事件って何？といくつも疑問がわいてきた。討論したことを報告して、今後の教材研究のきっかけにしていきたい。

二、構成・構造のよみ

**冒頭**

ある日のことで・・・

**発端**

するとその地獄の底に、・・・

**山場のはじまり**

すると、一生懸命に上

ったかいがあつて、・・・

◎**クライマックス**

今までなんともなかった

蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶらさがっている所から、ぶつりと音を立てて切れ

ました。

**結末**

・・・短く垂れているばかりでございませう。

**終わり**

・・・昼に近くなつたのでございませう。

(1) 構成について

この作品は、三つの場面に分かれている。一つ目はお釈迦様が極楽から地獄の様子をみているところ。二つ目は地獄にいる犍陀多（かんだた）の様子。三つ目は再びお釈迦様の様子である。当然第二場面が中心になっている。極楽と地獄を対比的に描きつつ、事件の前後で極楽の変わらない様子を描くことで、犍陀多の行いがちつぽけなものであることが強調されるような構成になっている。

(2) 発端について

発端の候補として以下のことが考えられる。

①ある日のこととございます。・・・つまり

冒頭＝発端である。「ある日」という

特別な日の出来事なので、特別な事件

の予感がする。しかし、お釈迦様が

つもと変わらずにぶらぶら歩いている

だけであり、事件らしい事件は起こっ

ていない。

②するとその地獄の底に・・・ここは犍

陀多が登場する場面であり、お釈迦様

と犍陀多との「出会い」の場面である。

過去に犍陀多が蜘蛛を助けたというエピソードの説明があるばかりであり、事件らしい事件は起こっていない。しかし、お釈迦様が蜘蛛の糸を下ろすという「事件」をしかけたと考えるなら、ここが事件の始まりと言える。

③こちらは地獄の底の血の池で、・・・ここ

は第二場面の始まりである。そういう意味で場面が変わるところなので、発端といえなくもない。しかし、お釈迦様にとっては、すでに事件をしかけており、ただ犍陀多が、蜘蛛の糸にまだ気づいていないだけのことである。

④ところがある時のこととございます。・・・

ここから犍陀多が蜘蛛の糸を見つけて、それを上つていくところである。そういう意味では事件らしい場面である。冒頭の「ある日」より「ある時」の方がより詳しく描写されており、時の密度も濃くなっている。事件が急激に展開していくことがわかる場面なので、第二場面だけを見れば、発端だといえなくもない。しかし、事件をお釈迦様のしかけだと読むと、すでに事件は始まっているととらえられる。

このように考えて、発端は②だと考えた。授業では、この小説における事件とは何か

を考えさせるなかで、お釈迦様が事件を創りあげていることに気づかせたい。この事件は犍陀多が引き起こした事件だととらえると発端は④なのかもしれない。しかし、この小説の主人公は誰なのかと考えてみたところ、どうも犍陀多がお釈迦様の手の内に乗って踊らされているような感じであり、主人公はお釈迦様だととらえた。

地獄に落ちた人間が反省したかどうかをお釈迦様が極限状態に追い込んで試したことが事件だと考えた。最後に悲しい顔をするのは、地獄に落ちた人間は改心が困難だとお釈迦様が悟ったのではないか。

(3) クライマックスについて  
クライマックスの候補として以下のことが考えられる。

①そこで犍陀多は大きな声を出して、「この罪人ども。この蜘蛛の糸は俺のものぞ。おまえたちはいったい誰に聞いて、上ってきた。下りろ。下りろ。」とわめきまじった。

ここは、犍陀多が自分のエゴのために他の罪人にわめくところである。物語の中で犍陀多の変化がもっともよく表れているところである。会話でもあり、緊張感が高まっている。

②今までなんともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下がっている所から、ぶ

つりと音を立てて切れました。

ここは、①に比べると描写的でなく説明調である。しかし糸が切れるという一番わかりやすい瞬間である。クライマックスは事件が確定したところととらえるなら、お釈迦様の仕掛けた事件が、糸が切れることで確定するので、②がクライマックスと言えるだろう。また、糸が切れるという出来事は、蜘蛛の糸という題名ともつながっており、主題がとらえやすいところである。

③お釈迦様は極楽の蓮池の縁に立って、  
またぶらぶらお歩きになり始めました。

ここは、お釈迦様が犍陀多に悲しそうな顔をする場面であり、主題が表れていると思われるところである。①に比べて事件性はなく緊張感がないが、お釈迦様を主人公と考えた場合には、ここでお釈迦様の「悲しそうなお顔」が見えるところであり、お釈迦様の変化がわかるところでもある。しかし、糸を切ったことがお釈迦様の意志＝判決だととらえれば、その時点で事件は確定しており、③の場面は終結部ととらえられる。

三、主人公はお釈迦様

クライマックスの読みとりを通して、この小説の主人公は犍陀多ではなく、お釈迦

様ではないかと読み取った。犍陀多を主人公として、そのエゴイズムに焦点をあてずぎると、道德教材のようになってしまいがちなので、そこは慎重に扱いたい。

また、この小説の事件とは何かを探ってみたい。犍陀多の視点でみると、蜘蛛の糸にぶら下がっていたら、下に罪人たちがたくさんぶらさがっていたので、「下りろ。」とわめいた事件になる。しかし、お釈迦様の視点で読み直すと、はじめから罪人が改心しているのかどうかを試す物語と読める。蜘蛛の糸が切れる瞬間にはこう書いてある。「そのとたんでございます。今までなんともなかった蜘蛛の糸が・・・」そのとたんとはお釈迦様が犍陀多のわめき声を聞いてすぐという意味である。そこにお釈迦様の意図が感じられる。犍陀多の運命は自分の助けた蜘蛛の糸にゆだねられていた。その裁きをお釈迦様が演出したのである。この物語の最初と最後の極楽の場面は、時が朝から昼に移ったこと以外何も変化がない。日常的なできごとなのである。お釈迦様にとっては、たいした事件ではないのである。授業ではそんな視点の違いにも目を向けさせたい。